

坂井種次先生の追悼号に寄せて

経営学部長 山本 純

改めて言うまでもないことだが、我々は坂井種次先生に多くの学恩を負っている。ここに経営論集追悼号を発刊できたことは、この学恩に対して少しでもお返しをしたいとの学部構成員の想いによるものであり、それを経営学部の誇りとしたい。坂井先生のご業績やご経歴をここで改めて述べることはよそう。病氣と闘われながらも、教育を最後の最後まで全うされた坂井先生のお姿を紹介することで、追悼の言葉とする。

平成19年、経営学部は商学部からの改組転換作業の真最中であつた。当時、商学部長を務めていた私に対し、その少し前から体調を崩されていた坂井先生から病状の説明があり、講義担当への対応などを話し合った。

その時、講義やゼミのことを心配される中で、体調の悪化からゼミ以外の講義担当を離れられたことについて、いつも通りの笑顔で「教室で私語をしている学生を叱りあげる醍醐味が味わえないのが寂しい。」とおっしゃられた。坂井先生は学生の間でも評判の厳しい先生であつた。それは彼の学問への厳しい態度の現れであると同時に、常々「教育は教員にとって命をかけた真剣勝負である」という彼の信念に基づくものでもあつた。また、学部改革に加われないことについて、涙ながらに「戦列から離れていることが悔しい」とおっしゃられた。財務管理論、現代企業の経営問題を専門とする坂井先生には、まさに経営学部への改組転換業務の中心になって頂きたかつたのだが、それは叶わぬ望みであつた。

その後、廊下で会うたびに「ゼミに入れない学生がいたら、どんな学生でも自分が面倒を見るから」と声をかけていただき、また自身で作成されたゼミ員募集のチラシを持って各教員の研究室を周り歩いていた。研究室でその訪問を受けた時、私は「この人は心底、教育者なんだなあ」と想い、思わず涙があふれたのを記憶している。こうして坂井先生は病と闘い、定年退職の最後の日まで教育に対する情熱を失わずに闘い続けたのである。

真の教育者の一人であろう。柔和な笑顔と同時に不正を働けば不動尊のような形相になる坂井先生は、我々経営学部の教員の心の中に師として生き続けるであろう。彼が与えてくれた学恩を胸に、我々はまた日々、経営学部の学生と、それぞれの学問と対峙していく。